



Title	倭国成立展開過程における玉つくりの研究
Author(s)	河村, 好光
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/57873">https://hdl.handle.net/11094/57873</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	かわむらよしみつ 河村好光
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第24065号
学位授与年月日	平成22年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	倭国成立展開過程における玉つくりの研究
論文審査委員	(主査) 教授 福永 伸哉 (副査) 教授 武田佐知子 准教授 高橋 照彦

### 論文内容の要旨

本論文は、日本列島において玉による装身が共通の社会的意味を有した弥生文化成立期から古墳時代終末期までを対象に、玉の製作、流通、使用の諸局面にわたって考古資料の詳細な分析を行い、玉と玉つくりの全体像を復元するとともに、その時期的展開のなかに倭の国家形成や民族性発現の過程を読みとろうとしたものである。全体の構成は2部11章の本論と序章、終章からなり、分量は400字詰原稿用紙換算750枚、図表105点である。

研究の課題と方法を示した序章に続いて、第1部では主に弥生時代の玉つくりをとりあげる。まず第1章では、弥生文化成立期に縄文系のヒスイ勾玉と朝鮮半島系の碧玉管玉を一連とするスタイルが北部九州で成立したことを指摘し、大陸の玉文化に連なりながらも、倭人独自の玉飾りが生まれた点にあらたな時代性を見いだす。第2章～第6章では、弥生時代の玉つくりの展開を総合的に論じる。製作面では、中期までに「施溝分割」という加工技法を共有しながら列島の複数地域で玉つくりが定着し、後期にはそのなかから良質の玉材産出地を抱える出雲や北陸の玉つくりが一層の発展を遂げることを明らかにした。流通面では、中期までは製品が地域的、局地的な分布にとどまっていたのに対して、後期以降には有力製作地の玉が広く移動し、流通の広域化と一元化が進行するという変化を指摘した。そして、この変化は本州諸島(九州、四国、本州)に分立していた各地域が「一つの大きな倭」とも呼ぶべき広域文化圏への指向を強めた結果であり、そうした動きのなかから畿内の集団を核とする「大きな倭」の主導権が萌芽すると理解した。

第2部では古墳時代の資料を対象に、製作や流通に中央の政治権力たる倭政権の関与が深まる過程を考察する。まず第7章～第8章においては、玉材で腕輪、容器、鏃などを象った古墳前期の碧玉製品の型式変化、製作技法、分布などを検討し、その安定供給を通じて各地の首長層への影響力を強めるという、政権の政治的意志を読みとる。また第9章で

は、朝鮮半島南部から出土する碧玉製品が金官伽耶との交渉を重視した倭政権からの贈与品であったと評価し、政権と碧玉製品の関係を補強する。第10章～第11章では、古墳中期以降に東日本で成立する玉つくり、さらに出雲工人の参入を得て大和で始まる玉つくりなどを、発展期の倭政権による手工品製作への関与の強化という点からとらえる。そして、7世紀前半の古墳終末期に玉つくりが途絶することを指摘して、葬送儀礼における玉の使用を禁じた「大化薄葬令」などを参考にしながら、千数百年にわたった倭人の玉装身の終焉が、倭国から律令国家「日本」への大きな転換点を象徴するものであったと位置づけた。

以上の理解をふまえて終章では、地域に定着した玉つくりを基礎にして玉による装身が倭人のアイデンティティ形成を促した弥生時代、倭政権の関与のもとに特定産地の玉が広範囲に波及し「倭国」と呼ぶ「民族的共同体」が形成された古墳時代、そして倭国から律令国家への転換のなかでついに玉が消滅した古墳終末期という3段階の玉つくりの展開を提示し、律令国家成立以前の列島史を玉つくりという視点から総括した。

### 論文審査の結果の要旨

有機質の遺物と違って朽ちることの少ない玉類は遺跡出土資料として広く認められるものであるが、社会構造や集団関係の変化を直接には読みとりにくいという性質もあって、従来その研究は製作技術や型式編年などに集中する傾向が強かった。本論文は、そうした玉類の専論研究としても十分に体系性を有するものであるが、さらに玉類をめぐる諸特徴の背後に倭人社会の統合の動きや中央政権の関与のあり方を読みとり、国家や民族性の形成過程にまで説き及んでいる点でより次元の高い研究となっている。

本論文の基礎をなす玉類そのものの研究は、自身が金沢市塚崎遺跡の資料を用いて行った製作工程や製作技術の分析が示すように十分な実証性に裏打ちされており、的確な研究史整理とも相まって、議論に安定感を感じさせるものである。

弥生中期までに各地に定着した玉つくりのなかから、後期には原材産出地に恵まれた出雲と北陸の玉つくりが発展して広域流通圏を形成し、古墳時代に誕生した倭政権がこれら二地域の玉つくりへの関与を強めていくという大きな流れを復元したこと、さらにこれを律令国家以前の「倭国」の成立展開過程と連動させて理解した点は、長期の歴史動向を大局的にとらえる考古学の強みを十分に発揮したものと見える。また、玉類が古墳時代の終焉とともに急速に衰退していくことを、国家形成過程における大きな転換期に重ねて説明する点も獨創性に富んだ主張であり、今後の検討に値する提起として高く評価できる。

ただ、本論文にも改善すべき点がないわけではない。玉つくりから国家や民族形成の過程に論及する視点が新鮮であるだけに、従来そうした検討の基礎をなしてきた古墳、集落、玉類以外の生産や流通に関する研究成果との「交通整理」がやや弱い点は惜しまれるところである。また、7世紀後半以降に玉の装身が消滅するとの指摘は重要であるが、高松塚

古墳壁画をその根拠とすることがはたして妥当かという問題や、古代の仏像の宝冠に玉を用いた事例が存在することなどを勘案すると、事実関係のさらなる吟味が不可欠であろう。

とはいえ、玉つくり資料の実証的分析と国家形成の理論的考察をバランスよく結合させた本論文は、玉類研究のあらたな地平をひらく学術的価値を有していると評価できる。よって、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。